

# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

## 「あきやきや の話」

このところ「じえじえじえ」という言い回しが話題になっています。一般的には、岩手弁の感嘆詞で、びっくりしたときに使う方言として扱われているようです。

筆者は、これまであまり目にしたことも、耳にしたこともない字面と響きのため、かえって記憶に残り気になっていたのも事実です。そこで、地元岩手の人に聞いてみたのですが、

「おらんとこ使わんなあ」

「岩手全体では使わん。聞いたことね！」

「だいたい、方言、いまだき使わん」

とのことでした。

その地域の古い方言は、たとえば川一本、田んぼ一枚隔てても言い回しが違うことがあり、その土地のことばが地域全域で通用するというわけではありません。それがまた方言の難しさでもあり、また、おもしろさでもあると思います。新潟市でも、信濃川一本挟んだだけなのに、通称新潟島と旧新発田藩領であった沼垂地域では、語尾が「そうらんて」の新潟島に対し、沼垂弁では「そうなんよ」と違いがみられます。

調べてみると、「じえじえじえ」は岩手の海岸部のごくごく狭い地域で漁師が使っていた、いわば漁師ことば。内陸部ではあまりみられません。本来ならば、驚くというより若干がっかり感がある時に思わず口をつく感嘆詞のようです。

ということは、新潟では「あきやきや」「あやや」（主に県下全域か？）「おここ」（主に旧西蒲原か？）「おぼぼ」「おぼちょ」（主に旧燕地区か？）等々がこの手の感嘆詞といえましょう。新潟の感嘆詞は、「ア行清音が破裂音系」ですが、同じ岩手県内でも、盛岡の一部では「じゃじゃじゃ」、宮古では「ざざざ」と使われるようで、主に岩手は「ザ行濁音系」。

「ア行清音が破裂音系」に慣れた新潟人としては、「じえじえじえ」の「ザ行の濁音」が妙に耳に残ります。

全国的には（共通語では）「あちゃちゃ」「あらら」「ありやりや」「およよ」等、やはりア行が主流ですから、「じえじえじえ」も「じゃじゃじゃ」も「ざざざ」も、その響きはインパクト大です。おまけにJやZ音の耳に残りやすい擬態語風の響きも手伝って、次第に他県人からも口まねされ、話題になったと思われます。

さて、わが新潟県のA行感嘆詞の使い方は、その法則さえ覚えたならば、いとも簡単。

たとえば「あきや（つ）」でちょっと驚きつつ落胆の気持ちが、「あきや〜」⇒「あきやきや」⇒「あきやきやきや」と次第に感嘆とがっかり感が増し、しまいには「あきやきやきやきやきや」となると悲壮感さえ漂うようになってきます。「きや」の数でその感情がいかようにも調節可能なことばは、方言ならではの味わいです。調べてみると「じえじえじえ」も同様。「じえ」から「じえじえ」、「じえじえじえ」、「じえじえじえじえ」と感嘆と落胆の度合いもアップしています。「あきやきや」も「じえじえ」も、地域の人々の暮らしの中から、自ずと生まれ使われてきたことばです。

単なる驚きならば「うわっ」で済むところが、「あきやっ」も「じえ」もびっくりしつつも、さて、どうしよばな、という後悔というか今後の身の振り方を考えると、いった、単純ではない様々な思いが見え隠れする“ご当地ことば”といえそうです。

